

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：34311

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02691

研究課題名(和文) グローバルリンガフランカとしての英語とオーラルコミュニケーション能力の伸張

研究課題名(英文) English as a global lingua franca and the best-fit strategies to improve the oral communicative ability for that purpose

研究代表者

若本 夏美 (Wakamoto, Natsumi)

同志社女子大学・表象文化学部・教授

研究者番号：50269768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本国内学習環境にありながら高度なリスニング能力を中心とするグローバル・リンガフランカとしての英語コミュニケーション能力を高めるプログラムを提案・検証することであった。特に、(1)日本国内にておいてリスニング能力をBレベルからC1レベル(CEFR)に向上させるために必要な条件は何か？(2)そのために自己最適のリスニング練習ストラテジーを学習者はどのように発見することができるか？という点に注視した。8週間にわたるプロジェクトの結果、協働学習を利用したグループはより効果的に自己最適方略(Best-Fit Strategy)を発見し、継続的に英語学習に取り組むことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化しつつある現代社会・世界を背景に、日本人英語学習者は留学こそが唯一の方法であるという強迫観念に陥っている者が多いが、留学さえすれば英語学習における問題が全て解決するわけではない。本研究は外国語環境下にある日本国内においてリスニングを中心とする英語オーラル・コミュニケーション能力を高めるための新たな英語学習プログラムを提案し、その有効性の検証を行うものである。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to propose a program to improve English communication skills as a Global Lingua Franca, focusing on advanced listening skills, in a learning environment in Japan. In particular, this study set the following two research questions: (1) What are the conditions necessary to improve listening skills from B to C1 level in Japan? (2) How can learners discover Best-Fit listening practice strategies to achieve this? The results of the eight-week project indicated that the group using collaborative learning was more effective in helping the participants find and establish their Best-Fit Strategy and were successful in continuing to learn English.

研究分野：応用言語学

キーワード：国際語としての英語 学習者方略 自己調整学習 リスニング Best-Fit Strategies Scaffoldings
練習方法 協働学習

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

グローバル化しつつある現代社会・世界を背景に、現在多くの大学(中高においても)では、より多くの学生(生徒)を英語圏の大学に留学させることに躍起になっている。異文化理解や英語に集中的に触れる機会など留学することの意義は認めるが、留学さえすれば英語学習における問題が全て解決するわけではない。日本人英語学習者は留学こそが唯一の方法であるという強迫観念に陥っているだけである。また実際に留学しようとしても経済的な観点からも希望者が全員留学できる状況にはない。一方、頓挫したものの「大学入学共通テスト」においては4技能を評価する民間英語テストの活用が計画されるなど、このことを捉えて経済格差が学力格差に移し替えられる危険性があるとの見方もあった。しかし、真の問題は、(1)日本人が目指すべき英語モデルが従来の英語圏のネイティブ・スピーカーから「国際語としての英語」にパラダイムシフトできていないこと、(2)日本国内でも利用可能なリソースをこれまで十分に活用してこなかったこと、(3)自国で英語コミュニケーション能力を伸ばす方略使用を積極的に考えてこなかったこと、以上の3点にある。本研究計画は外国語環境下にある日本国内においてリスニングを中心とする英語オーラル・コミュニケーション能力を高める学習プログラムを反転授業と過去40年あまりの学習者方略研究の知見をもとに学習者方略研究の視点から再検討し、新たな英語学習プログラムを提案し、その有効性の検証を行うものである。

英語コミュニケーション能力の向上、グローバル化しつつある現在の世界の情勢では日本の将来発展の鍵を握る。アメリカで英語を話す人口とほぼ同じ数の中国人が英語を話し、近い将来世界の労働人口の25%が英語を話すインド人となることが見込まれる現状で、日本人が英語コミュニケーション能力を身につけることは急務である。本研究の特色として次の3点があげられる。

リスニング能力に注視:英語コミュニケーション能力というと、教員を含め多くの日本人がスピーキング能力をイメージする。しかし「聞いて理解」することなしにコミュニケーションは成立しない。日本人英語学習者にとって最も重要な問題は「聞く能力」であると位置づける。またグローバル・リンガフランカとしての英語リスニング方略を調査するためにOxford大学Rose博士と研究代表者との共同研究で開発している質問紙を活用する(LCS-Q: Rose博士の了承済み)。

反転授業:授業と課外学習の有効な関連性を反転授業の思想から援用する。インターネットをリスニングの練習方略に組み込み、インターネットは重要なリソースでありながらこれまで効果的に活用されてこなかった問題点を修正する。

自律的学習:学習は学習者に生じるのではなく、学習者によって引き起こされるという自己調整学習の主体的学習の考えは外国語環境下での英語学習に重要である。本研究は方略だけでなく動機の維持、外向性・内向性という学習スタイルと協働学習、有利な学習リソース及び学習環境の選択的利用など、学習のコントロールという視点を盛り込む。

本研究は、日本人の行動習性と日本国内学習環境の特徴、学習者方略を効果的に活用することによりリスニング能力を中心とするグローバル・リンガフランカとしての英語コミュニケーション能力を高める新たな学習モデルを、最新の科学的見地をもとに提案・検証する。特に、リスニング方略、学習者スタイル、語彙能力、反転授業、インターネット活用、協働学習、自律的学習に注目する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本国内学習環境にありながら高度なリスニング能力を中心とするグローバル・リンガフランカとしての英語コミュニケーション能力を高めるプログラムを提案・検証することにある。

日本国内にてにおいてリスニング能力をBレベルからC1レベル(CEFR)に向上させるために必要な条件は何か?

そのために自己最適のリスニング練習ストラテジーを学習者はどのように発見することができるか?

3. 研究の方法

学習者の現状把握

学習者の現状を把握するために日本人英語学習者大学生を対象に、オックスフォード大学Rose博士との共同研究で開発をしているLCS-Q(Listening Comprehension Strategy Questionnaire, for learning and using English as a Global Lingua Franca, Japanese version, Wakamoto & Rose, 2021)を利用した質問紙調査を行う。

介入研究

8週間にわたる自己調整学習の中で自己最適方略(Best-Fit Strategy)を、協働学習を利用し発見する方法を採る。

参加者

研究プロジェクトへの参加者は 53 名の女子大学生である。その内 33 名をコントロールグループ（20 名は Native English Teachers が英語でコンテンツを教える、13 名は CALL 教材を用いて授業外に学習する）、残りの 20 名を協働学習を通して自己最適方略を探す実験グループとして設定した。研究プロジェクトは 2020 年 4 月～7 月にかけて、LCS-Q を利用して事前調査の実施、実験グループにおいて Learner Strategies に関する事前学習を行い、2020 年 10 月下旬より 12 月にかけての 8 週間をプロジェクト期間として取り組んだ。2021 年 1 月に LCS-Q を再度実施し、方略についての認識の変化を調査するとともに、どのような自己最適方略を発見したのかについてプレゼンテーション（個人）を実施した。

4. 研究成果

4.1 Real-Life Practice Strategy の認識の変化

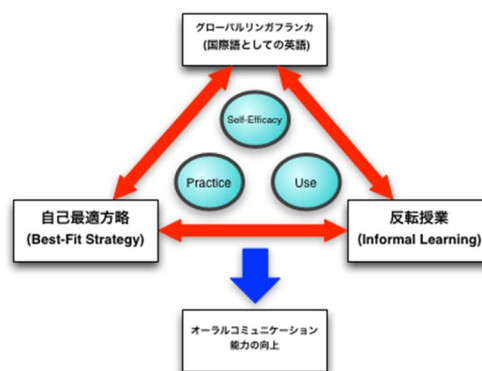
リスニング練習の方法（LCS-Q, No. 3）に関しては実験グループでは有効な方法を全員が見いだしたと回答した。またリスニング練習教材（LCS-Q, No. 1）に関しても、事前調査では自分に合った教材がないと回答した参加者も存在したが、8 週間のプロジェクトを通して全員が肯定的な回答をしている。

4.2 Real-Life Practice Strategy とリスニングに対する自信

事前、事後調査を通して全参加者（N=53）が有効なリスニングの練習方法とリスニングに対する自信の間に有意な相関を示している（ $r = .549$ [pre] / $r = .523$ [post]）。有効なリスニング練習方法がリスニングに対する自信を高める可能性を示している。

4.3 自己最適方略（Best-Fit Strategy）

実験グループでは、シャドーイング、映画の利用、スマートフォンのアプリ利用、新聞や本の活用、CALL 教材、TED/YouTube ビデオを「リングフランカ」として英語を活用するために 1 週毎に週替わりでグループ全体で取り組み、授業外に各自がその適性を試した（反転学習、右図参照）。その結果、シャドーイングを App と組み合わせて使うことを自分に適した戦略として報告している参加者が多かった。この組み合わせは活用が容易で効果を短期間で実感できるという利点がある。一方で Netflix など映画を自宅で容易に利用できる環境が整ってきたこともあり、映画を英語字幕または日本語字幕で活用することを中核とする報告も多数みられた。



一方で 8 週間というプロジェクトを実施するにあたりグループ全体で取り組むことの利点を強調する報告も見られた。これは授業外に反転学習として行っているため、アルバイトなど各自が忙しくする中で英語学習を継続するには十分なモチベーションを個人で維持することは容易ではないことを示している。その証左となるのがコントロールグループの参加者のコメントである。CALL 教材を利用しようが Native English Teachers が授業を担当しようが、個人で学習を授業外で続けることは困難であるというものである。中には、課題を出してもらわないと何を学習して良いか分からないというコメントまで見うけられた。ここに外国語学習環境下で英語を学習し続けることの状況的困難さを見てとることができるのではないだろうか。今回の実験グループはある意味では、授業内でグローバル・リングフランカとして英語能力を伸ばさせるための戦略を毎週 1 つずつ紹介されることが学習の足場（Scaffoldings）になり、協働学習的に共にプロジェクトに参加することが継続的な学習動機になった可能性がある。

4.4 自己最適方略と自己調整学習

留学をすることなしに英語能力を伸ばすには、という大きな課題を設定しながらこの 3 年間プロジェクトに取り組んできた。この 3 年間は同時に、COVID-19 による大学の授業実施の危機を感じながらこの研究課題に取り組んだ期間でもあった。そのため、当初予定した期間のプロジェクトを十二分に実行できなかったのは事実であるが、図らずも、オンライン授業やオンライン留学、教員の立場ではオンライン学会などを経験することになり、「実際に現地にいかに学ぶ、参加する」ことのメリットも知る機会になった。英語学習はある程度の期間継続的に取り組む必要があり、授業も重要ではあるが、学習者が自律的かつ意欲的に取り組むことが改めて重要であることを実感している。学習者が学ぶための方略とモチベーションを兼ね備えなければ国内で英語能力を伸ばさせることは困難である。今回の実験グループの参加者の中にはシャドーイングを中心とした方略を自己最適方略として利用した結果、TOEIC スコアが大きく伸ばした者も存在する。そのようなケースを目の当たりにすると学習者の好みに適した学習者方略を見つけられるように授業内でサポートすることの重要性を再認識させられる。今後は、今回実現することのできなかった学習者のタイプ別に自己最適方略のタイプの整理を課題として継続的に研究に取り組んでいきたいと考えている。留学することなく英語能力を伸ばさせることは今後も国民的悲願であり喫緊の課題であることを胸に刻み研究を継続したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大塚朝美、崎ミチ・アン、今井由美子、若本夏美
2. 発表標題 A Search for the “Best-fit” Listening Strategies
3. 学会等名 外国語教育メディア学会第60回全国研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Natsumi Wakamoto, Michi Ann Saki, Tomomi Otsuka, Yumiko Imai
2. 発表標題 Developing Listening Comprehension Ability by Helping College Students to Explore Listening Strategies to Use English as a Global Lingua Franca
3. 学会等名 AILA World Congress 2021
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	崎 ミチ・アン (Saki Michi Ann) (50792933)	同志社女子大学・表象文化学部・准教授 (34311)	
研究分担者	今井 由美子 (Imai Yumiko) (70450038)	同志社女子大学・表象文化学部・教授 (34311)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大塚 朝美 (Otsuka Tomomi) (80450039)	大阪女学院短期大学・英語科・准教授 (44409)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関